

り不活潑なるものがあるべきであるから地震に對しては此の種の研究が甚だ必要である。而して恐らく斯くの如き性質は其の斷層が存在する

處の地質學的位置と方向とに依つて大要決定せらるるであらう。

長崎市の生産概況

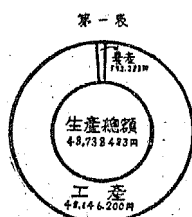
(昭和三年一月三十日
長崎要塞司令部檢閲済)

森 壽 美 衛

長崎市の生産額の殆ど全部は工業で農産は極めて微々たるものである(第一表)衰微しつつも長崎市はやはり商港としての長崎であるが工業的特色も多分に持つてゐる。長崎市は工業によつて今日の壽命を保つてゐると言つても過言ではない。

一、工業

工業の過半は機械器具類で其の大部は三菱の造船である。この汽船の産額は建造ばかりでなく修繕も含んでゐるが修繕は約一割であるから殆ど大部は造船である。三菱兵器製作所の産額

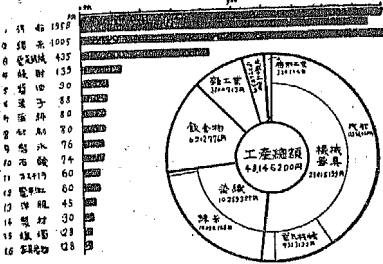


は絶対秘密に附せられて知るに由もないが、從業者より推せばこれ亦相應の巨額に達するであらう。三菱會社の生産は本市生産の大部を占め本市の生命は一にかかつて三菱にあるといふことが出来る。實に港の西岸立神より飽ノ浦方面に亙る壯大なる造船工場船渠を眺めたる時、其のハンマーの囂々たる音を耳にする時、亡び行くと言はれる長崎にも一の活路を發見するのである。三菱の景氣の好不況は直に市況に影響を及ぼし

造船艦入船渠の殺到した時は街行く人も一段と笑を浮べてゐる。

三菱の製品に次ぐは長崎紡織會社の綿糸、第三は電氣機械でこれも可成の多額に達してゐる市の名産たるカステーラ、鼈甲細工、石鹼等も相當の産額を以てゐて産物の性質、需要等より考ふるも現今の六七十萬圓の産額は先づ多いといふべきである。焼酎は一般に本縣に多く栽培せられる甘藷より造るもので飲食物の第一位で

第二圖 工業額比較



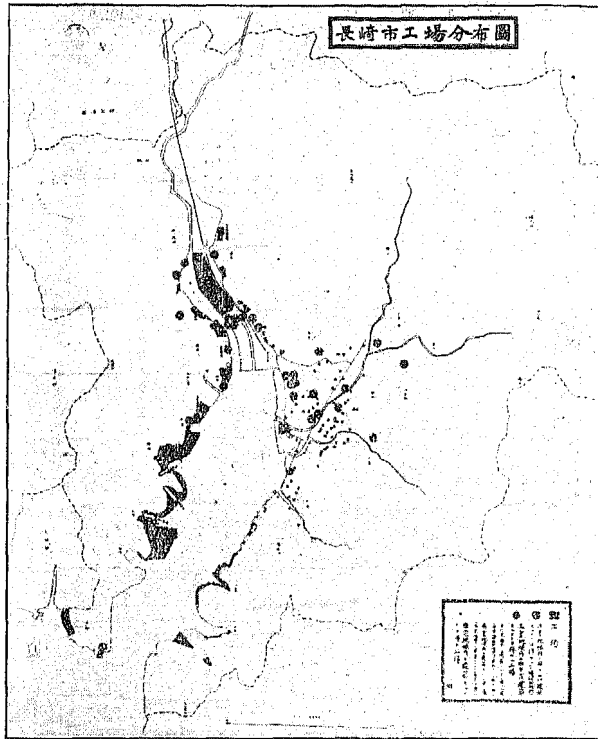
の首位を占めてゐる。鮮魚列車は運轉されても

ある。漁港としての長崎では水産加工品はまだ振はない。僅かに蒲鉾の八十萬圓を筆頭に他のカラスミ、鱧鰯、削節、櫻干等合せて二十五萬圓に過ぎぬのは少々心細い。本縣は北海道に次ぐ漁獲高を有し水産としては府縣中

なほ生魚としての販路は狭いのであるから、本縣漁業の根據地たる當市は將來この水産製造にはもつと努力すべきである。製米の多いのも漁船に供給することが多いからで、積船に便利な浦上川口から灣岸の旭町に數艘の製米所が並んでゐて黒い導管から碎水がすさまじい勢で發動汽船に積込まれてゐるのも活氣を添へる。

各種の工業額と従業者とは其割合がほぼ一致してゐるが(別表)細かに各製品に就て一人當年産額を見るに最高は酒類の三萬圓にして之に次ぐは製氷、石鹼、醬油、電氣機械等の一萬圓内外である。造船、綿糸はずつと下つて三千圓足らず、カステーラ、菓子は一萬圓にも達しない。即ち醸造は比較的生産能率高く化學製品之に次ぎ人手を多く要する作業は一人の生産高が極めて低い。

以上は主として大正十五年昭和元年中に於ける産額多きもののみに就て略説したのであるが更に其等の工場の分布に就ては別圖を参照せられたい。廣き地所を要する大工業地は長崎港の



第四表 作物収量比較

蔬菜類	687.6
穀類	604.3
豆類	7.0

熟も速かで秋冬の交のみにても五六回位收穫してゐる。それは本圃の白菜等の未だ成長中にすでに苗床にて次の白菜の苗を相當に培養し置き本圃の收穫後直に大なる苗を移植する法を行つて

居るからである。

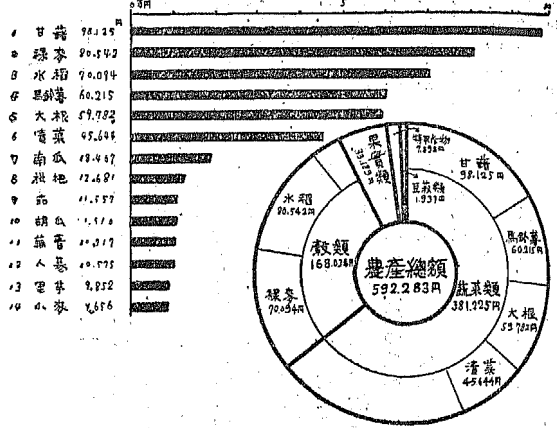
宅等密集し、農作を營む餘地を存しない。農産額の多いのも極めて當然の事である(第一表)。

農産總額のうち約六割半は蔬菜類である。これは市部又は市附近の農業として普通の型であ

農作地は浦上川流域に多く開け竹ノ久保、城山地方より浦上川左岸一帯は『北西農業地域』として一特色を有してゐる。米麥の栽培は勿論で

らう。普通作の穀類と蔬菜とは栽培段別に大差なきも(第四表)産額に於て前者は後者の二分一にも及ばぬのは都會地及附近では蔬菜園藝の有利なることを物語つてゐる。ただし長崎は冬季比較的暖いので同一地面より幾回となく收穫し得られるからでもある。菜類の成熟も速かで秋冬の交のみにても五六回位收穫してゐる。それは本圃の白菜等の未だ成長中にすでに苗床にて次の白菜の苗を相當に培養し置き本圃の收穫後直に大なる苗を移植する法を行つて

第五表 農産額比較



他の北東部一帯の廣面積を占むる『北東山岳地域』にも可成廣く分布してゐる。平地に乏しい此地方では安山岩より成る峻しい山岳の中腹又は頂上までもよく耕作せられ階段狀の幅狭き畑が重疊してゐる有様は亦當市の一異觀である。

生産情況としては此他原料及生産品の需給關係、沿革、最近の趨勢、製法等に至るまでなほ多くの記述すべき事項があると思ふが、今は單に大正十五年昭和元年の長崎市生産總覽によりて作りし表と本市の各種分布圖を參照して思ひ出したまゝを雜然と書き並べたのみで筆を擱くことにする。

第九卷第四號正誤

誤

正

- 四五頁(第 圖版第七第八圖) (第四圖版第七第八圖)
- 四七頁(第 圖版第六圖) (第四圖版第六圖)
- 四八頁(第 圖版第一—第五圖) (第四圖版第一—第五圖)
- 五一頁第三行は第四行に續く